



神社と人生儀礼。

ひきかたの天照る月は神代にか出でかへる
らむ年は経につつ

『万葉集』

今年も気仙沼市本吉町小泉の八幡神社御例祭に参列させていただきました。

神輿は、建物の土台だけを残して何もなくなってしまう集落の跡をめぐり、高台の学校まで渡御します。この行列に、今年は新たにお神輿が一基加わりました。宮城県竹駒神社の千葉宮司さんのおはからいで東京都杉並区大宮八幡宮の子供神輿を寄贈していただきました。昨年は、自分たちで作った段ボールの神輿を担いで途中から参加していた中学生たちが、本当に楽しそうに寄贈された御神輿を担いでいました。そして丘の上の学校では、なんと幼稚園の園児たちが手作りの御神輿を担いで騒いでいるではありませんか。

大勢の子供達にお母さん、そしておじいちゃん、おばあちゃんたちも集まっています。見渡す限り、一軒も家は見えないのに。仮設の舞台があり、出店も出ていました。笑顔笑顔の皆さんでした。八幡神社の山内宮司さんは「壊滅した集落の跡を神輿渡御を行うことは誠に忍び難いことですが、これから小泉地区を復興するには子供たちも含めて地域の人々が鎮守の森を中心とし、心をひとつにして生きていくことが大切である」と思い、あえて実施しております。今後とも、壊滅した小泉地区の集落を新しい土地に新しくつくりあげるよう、地域の人々と共に精魂込めるつもりです。」とおっしゃっておられました。

山内宮司さんは八十七歳になられます。津波にのまれて流されるところを奥様に引っぱってもらい助かったと伺っております。奥様とふたり、いまだ四畳半一間の仮設住宅に暮らしておられます。宮司さんは教師もされていたので、大勢の教え子さんに囲まれ、神社の復興と地域のために頑張っていらっしゃいます。

来年もお参りに参ります。山内宮司様のご活躍と小泉地区の皆さまの素晴らしい笑顔を見せていただくために。できれば釣り竿を持って。

(宮司)

あんざんきがん はらおび

安産祈願(腹帯の祝い)

妊娠五か月の戌いぬの日に安産を祈願して妊婦が腹帯をつけ、氏神様に子供の健康な生育と順調なお産をお祈りします。

腹帯の祝いは、犬のお産が軽く多産であることにあやかり戌の日に行いました。妊婦の生家から腹帯と米と小豆が送られ、妊婦は産婆に腹帯を巻いてもらい、近親者を招いて赤飯をふるまいました。腹帯は「岩田帯」や「斎肌帯」と言われ、社寺で安産祈願をした布、棺に結ぶ縁の綱、上棟式の旗、夫の褌などが使われました。帯の間に熊の腸や毛、蛇の抜け殻を入れる、白布に「犬」と書く、紅を指す、鬱金色の布や紅白の布を重ねて使うなどしました。腹帯を巻くことで、安産を祈願するほか、胎児を保護したり、胎児の肉体も霊魂も妊婦の体内にしっかり固定すると言われました。また、この時から妊婦の産の忌が始まるとされました。

*産の忌：出産に伴う儀礼は、産の忌の観念で貫かれており、サンビ、アカビ、チブクなどと呼ばれ神に対する慎みとして守られました。忌は、避けたり忌み嫌うといった意ではなく、精進潔斎のために慎み、籠るという意味なのです。こうした風習は、出産を「神ごと」と考える宗教心に基づいており、新しい生命の誕生は自然の神秘そのものであるゆえ大きな畏れを抱き、神意を損なわぬよう務めたのに始まる、とも考えられています。

神社と人生儀礼。

— 安産祈願からお葬式まで —

人が誕生してから人生の節々で行われる儀礼。昔から人々は子供の成長や家族の健康を氏神様に祈り、感謝し、親しい者たちで祝いました。現在でも私たちは同じ願いを抱き、地域によって様々な形で人生儀礼の風習は残っています。人々の暮らしの記録である民俗学の資料から、神社と関係の深い儀礼を中心に日本人の人生儀礼を紹介します。

うぶゆ うぶぎ 産湯と産着

誕生後に子供がはじめて浴びる湯を産湯、産湯の後や生後三日め、初宮参りに着せる晴れ着などを産着といいます。



多くの地域で生後三日めの湯をウブユ、ユヅメ、ミツカユなどと呼び、子供にとって最初の人生の節目である「三日祝い」として重視しました。産湯は、子供の魂をこの世に移行する際の禊の儀礼であり、新たな生命力を身につけるための儀礼でもあると考えられています。また、産湯の中に塩や酒を入れると風邪をひかないとも言われました。

産着は、生後三日めに着せるものとしている地域が多くあります。それゆえ三日衣装やミツメギモノと呼ばれていました。また、テヌキ、テトホシ、ソデツナギ、テツナギとも呼ばれ、人並みの着物の袖に手を通すことに意味がありました。産着には「背守り」を縫い付けたり、鬱金染めか白の木綿の下着に、麻の葉模様の着物（女兒は赤、男児は青や黄色）を着せることが多かったようです。いずれも魔除けの意味があり、麻の葉には、麻のようにすくすく育つようにという願いも込められていました。

お七夜 命名式

生後七日めのお祝いです。この日までには子供に命名して人の世に迎え入れられます。

母親の産の忌明けの一つの段階にもあたります。子供にとってはウヒデ、デジメ、イダシハジメなどといい、産後初めて屋外に出し、家の神、便所神、竈神、井戸神などを拝ませました。また、子供の命名は七夜までにするならわしで、命名書は神棚に供えられました。

初宮参り

生後始めて氏神様にお参りして子供の健やかな成長を願います。



男児は三十二日め、女児は三十三日めにすることが多いのですが、地域によっては、早くて生後七日めや百日を過ぎる例もあります。子供の幸せな成長を願うとともに、新しい氏子として社会に認めてもらう儀礼でもありました。子供の忌明けは三十三日、母親の忌明けは七十五日と言われ、母親の忌が明けていないため、地域によっては姑や産婆などが子供を抱いてお参りをし、母親はお宮参りは鳥居まで、百日の参りは神前にとされました。また、健康に育つよう子供の額に鍋炭や紅で「大」、「犬」、「×」などを書いたり、神様に強く印象づけようと神前でわざと泣かせて、御加護を祈るという風習もありました。

はつぜつく

初節句

生後始めて行う節句のお祝い事です。

女児は三月、男児は五月の節句を祝います。里方や親戚などから雛人形や武者人形、幟が贈られるので、お返しに招いたり菱餅や粽、柏餅などを贈りました。古くは男女の節句を区別せず、三月の初節句に初雛、初天神の泥人形が贈られ、初正月には男児には破魔矢・弓を、女児には羽子板・手鞠などを贈りました。

お食い初め

生後百日めに子供に成人と同じ食事をさせる儀式です。

子供を本膳（二汁三菜）につかせ、赤飯を一粒、あるいは菜を箸の先につけ口元に運び、食べさせる真似をしました。この儀式を百日の一粒食ヒ、ヒトツブナメ、あるいはハガタメ、ハシヅロエ、ハシヅメなどといい、赤子に一粒でも食べさせること、成人と同じ食事をすることに意味がありました。食膳には赤飯、焼き魚、そして「歯固め」といって小石や、干しアワビ、タコを添えたりしました。赤飯には子供の枕に入れておいた小豆を使ったり、魚にはホウボウ、カナガシラ、イシモチなど頭の固い魚を使ったりしました。「歯固め」の小石は、氏神様を祀る神社の境内で拾い、子の名前を書いて神社に納めました。



七五三参り

十一月十五日に五歳の男子、三歳、七歳の女子が神社にお参りをして神様に成長を感謝し今後の健やかな成長を祈願します。

もともとは男女三歳の祝いを「髪置き」、男子五歳の祝いを「袴着」、女子七歳の祝いを「帯解き」といい、子供の成長の節目に行った儀礼でした。髪置きは今まで剃っていた髪をこの日から伸ばし始める儀式、袴着は袴を着ける儀式、帯解きは着物の着け紐を取り帯に替える儀式です。幼児が成長していく段階ごとに、その守護を氏神様に祈り、社会からも祝福を受けたのです。また、「七つ前は神のうち」と言われ、七歳前後に氏神様に詣でることで正式に氏子入りし、はじめて社会の一員として認められました。



弥生神社では初宮詣の方に、お食い初めのお椀とスプーンをさしあげています。手づくりの巾着袋でお包みしています。



成人式（成年式）

大人の社会への仲間入りをして公認を得る儀式です。神社を参拝して氏神様に成人になったことを奉告します。

現在では満二十歳で成年式が行われ、神社を参拝して成人になったことを氏神様に奉告します。昔は男子が十五歳頃、女子は十三歳頃に成年式が行われ、一人前の社会人とみなされました。公家や武家社会では、「元服」という冠や烏帽子を着用する儀礼がありました。庶民の間でも山詣りや名替え、剃髪、結髪など様々な成年式に関わる儀式が行われました。また、仮親を迎えて実親の下から離れる慣習も広まり、村の若者組や女子組への加入が成年式にあたることもありました。

厄年参り

人生の折り目であり忌慎^{いみづし}むべきとされる年に氏神様にお参りをしてお祓い^{うぐい}をします。



数え（生れた年を一歳とする）で男性の二十五、四十二、六十一歳、女性の十九、三十三、三十七歳が、厄難がある年として忌慎^{いみづし}む風習があります。親戚などを招いて饗宴^{けいげん}をしたり氏神様に参つて厄祓い^{うぐい}をします。地域によつては人生の折り目となるゆえ祝う年ともされました。折り目の年を機に、共同体の神事に携わる重要な役を担うことが多いため物忌みが要されたと言われています。

結婚式

神様の計らいによつて縁が結ばれたことに感謝し、互いに尊敬しあいながら人生を歩むことを神前に誓います。



嫁入りの当日、茶碗に山盛りのごはんを嫁に食べさせて、家を出るとき茶碗を割つたり、嫁が自家の玄關先で薬火^{くすりび}をまたぐなどしました。また、婿家で嫁が松明の火をくぐる、炉の周りを回るなど火を強調した儀礼が多く行われました。主婦として竈^{かまど}の火を司ることの象徴とも考えられています。その他、水、鍋蓋、草履、傘をめぐる儀式もみられました。式の多くは婿の家で行われ、婿家の先祖たちに挨拶することにより、新たに家の成員になることを確認しました。また、夫婦固めとして、新郎新婦が同じ器の高盛飯^{たかせい}をわけて食べるなどしました。



年祝（長寿の祝）

数え年六十一歳の還暦から、節目ごとに家族や親類、友人が長寿のお祝いをします。

還暦は、干支の組み合わせが生まれた年と同じになる年で、暦が一巡して還る年です。還暦で新たに生まれ変わるとされ、子供が魔除けのために赤色の産着を着たことから赤色の頭巾やちゃんちゃんこを贈る風習があります。還暦以降、七十（古稀^{こき}）・七十七（喜寿^{きじゅ}）・八十（傘寿^{さんじゅ}）・八十八（米寿^{まいじゅ}）・九十（卒寿^{そじゅ}）・九十九（白寿^{はくじゅ}）、百（百寿^{ももじゅ}・上寿^{じょうじゅ}）歳の年にお祝いします。また、これらの年祝いを行う年齢を厄年とし、厄払いをする地域もあります。

葬式

人が亡くなった夜や翌晩に通夜を行い、死者に付き添いお別れをします。葬式はご遺体を埋火葬して、死者の靈魂^{たましい}を慰めて送る儀礼です。神道での葬式を「神葬祭^{しんそうさい}」といいます。

葬式ではかつて、「野辺送り」という喪家から葬儀場、葬儀場から火葬場までの葬列が重視され、出棺時には、死者の使つていた茶碗を割つたり、座敷を箒で掃き出したり、目籠^{めかき}を転がす風習がありました。戸外では仮門を設置したり、弓を射る儀礼も行われました。また、村落には葬式を協働で行う葬式組がありました。

* 神葬祭について

神道では、人が亡くなることを「帰幽」とよび、「帰幽奉告の儀」「枕直しの儀」「納棺の儀」が家庭で行われます。枕直しの儀では、頭を北もしくは部屋の上位に向けて安置し、しばらくして納棺を行い、神様に帰幽したことを奉告します。

その後、神職の奉仕により、通夜祭、遷霊祭（霊堂に御霊を遷し留める）、発柩祭、葬場祭、埋葬祭、帰家祭などが行われます。斎場は清浄に保たれ、神饌を供えて玉串（神）を捧げ、祭詞によつて祈念します。

そして帰幽の日から十日、二十日、五十日と十日ごとの節目に、霊前と墓前において祭儀を行います。とくに五十日祭は、忌み明けを意味する重要な儀礼となります。

* 霊堂：「御霊代」ともいわれ故人の御霊が宿る依代です。仏式でいう位牌にあたります。神道では霊堂に故人の御霊を移して家庭で祀るにより、故人や先祖は守護神となり、子孫を守ると考えられています。

【参考文献】

大塚民俗学会編『日本民俗事典』（弘文堂）／國學院大學日本文化研究所編『神道辞典』（弘文堂）／倉石あつ子・小松和彦・宮田登編『人生儀礼事典』（小学館）／谷口貢・板橋春夫編著『日本人の一生 通過儀礼の民俗学』（八千代出版）／飯島吉晴、宮前耕史、関沢まゆみ著『日本の民俗 8 成長と人生』（吉川弘文館）／八木透編『日本の通過儀礼』（思文閣出版）他

ひさかたの天照る月は神代にか出でかへるらむ年は経につつ

『万葉集』 卷第七 雑歌 一〇八〇

【口語訳】空に照る月は、神代の昔に戻って出てくるのだろうか。時は過ぎて行くけれども。

【註釈】月は日々に神代に帰るからこそ、時は過ぎてても月光は万古不易なのかと詠う。

佐竹昭広他校注『万葉集（二）』岩波文庫より

古今のうた 「月を詠う」

しばらくは息つめて遠きものを恋う櫻の上の赤く圓き月

高安国世『砂の上の卓』（昭和三十二）

人間の夢を聚めて空に照る遠き世に生れいまを澄む月

来嶋靖生『月』（昭和五十二）

さやけさを地に盈たしつとつきりと寒月があり唯寒月が

横 弥生子『君ならどうする』（平成十五）

月の暈にじむ夜更けを歩みつつ明日のわれにまだ逢わずも

高野公彦『甘雨』（平成十八）

ああ空に客人のやうな月がゐて念仏踊りを舞ふ影を照らせり

渡 英子『レキオ 琉球』（平成十七）

今日の社務猫



なにかと忙しいけど見かけたら声をかけてください。



ちよろ(母)



きーこ(娘)



総代さんより



小さい頃の思い出と神社への思い

井上久夫

先輩の地域総代から総代の引き継ぎをお願いされ、あつという間に七年が経とうとしています。その間、役員や氏子の皆さんに支えられ、私なりに神社に少し貢献できたのではと思っています。私のモットーは人を一人でも多く知り、良い繋がりを持つことです。それを自分の宝としています。弥生神社を通じて、宮司様をはじめいろいろな仲間との良い出会いがあり、心より感謝をしています。

小学生の頃の思い出として、私の家は国分南の果てであり、弥生神社をとっても遠くに感じていました。昭和二十七年頃のことです。弥生神社に行くのは、例大祭の時くらいでした。神社近くの同級生を誘い親から五十円の小遣いを貰い、喜んで出かけました。当時の夜店は、当てくじ、ブリキ製のおもちゃ、綿菓子、金魚すくい、ヨウヨウ釣り等が中心でした。夜になると夜店の明かり取りに、あちこちでカーバイトガス灯の鼻のつくような臭いがしたのを今でもよく覚えています。

時々、夕食を済ませてから父に連れられ、小田急線、相鉄線の上にかかる並木橋に行ったものです。橋の木の欄干に囃子太鼓を括り付け、大山の方に向かって、父の指導のもと、国分青年団の人たちが一生懸命練習されているのを、夕涼みがてら見学していました。今になって思うと、この場所は今、真夏でも風通しが良くて蚊もおらず、近所に家も少ないので気持ちよく太鼓を叩け、囃子の練習には適していたと思います。

今、私が思うことは、弥生神社にもっと崇敬者の方々が参拝して頂けるようにしたいということです。霊験あらたかなところへお参りするののも一つのやり方ではありますが、やはりまずは地元の神社に参拝して氏神様、鎮守様に挨拶するのが基本だと思っています。それには、もっと親しみやすく気楽に崇敬者が参拝できる神社にしたいものです。例大祭や初詣等の中に、将来まで続いて残っていく弥生神社らしいメイン行事がでないものかと思っています。役員だけでなく、地域の皆様の御協力をこれからより詳しくお願いします。



5月13～15日 参拝旅行

ますみだ まなし
真清田神社（愛知）・水無神社（岐阜）

けんこく
長野県護国神社



境内の菊は総代さんが育ててくださっています。



8月31日

バーベキュー大会



仙台・気仙沼市

参拝旅行

＊前号でご案内しました参拝旅行の報告です。

五月二十一日から二十三日、神奈川県神社庁相模中央支部と氏子総代会の主催で、仙台、気仙沼市を四十名の参加者が訪問。当社からは神職、氏子総代六名が参加しました。

大崎八幡宮参拝

仙台市の大崎八幡宮にて正式参拝。国宝の社殿内部の重厚さ、彫刻の素晴らしさに息をのみました。小野目宮司様より、当社の歴史や建築について御説明いただきました。また、大崎八幡宮さんは震災直後から現在も神社をあげて東北被災地の神社への復興支援に積極的に取り組まれており、その御活動について伺い、いまだ被災地の神社における復興が厳しい状況であることを認識しました。

気仙沼市の「南三陸ホテル観洋」に宿泊。懇親会には、南三陸小泉地区に鎮座する八幡神社の山内宮司御夫妻にも御参加頂き、日本舞踊歴三十年という奥様に素晴らしい舞踊をご披露いただきました。衣装など全て流され、震災後に一度は断念したそうですが、宮司様の励ましもあり復帰されたそうです。

八幡神社参拝

小泉地区訪問

翌朝、市内を走るバス車内で気仙沼市八幡神社の山内宮司様より津波による被害状況などの御説明をいただきました。南三陸の本吉町小泉地区へ。小雨降る中八幡神社を参拝し、宮司様より参加者全員に、御自身が奉製された有難い御札をお分け頂きました。その後、高台の小泉小学校を訪問し、町全体を見渡しなが、小泉地区の方より震災当日の様子や復興の現状などお話を伺いました。

一景島神社・紫神社参拝

南町紫市場訪問

津波で流され新たな社殿になった気仙沼市の一景島神社、そして紫神社を参拝。紫神社は、震災直後から一五〇名程の方が避難し、七か月二十日間の避難生活を送られました。三自治体が九つの係を分担し、運営したそうです。ここで避難生活をした方々が始めた仮設の商店街が「南町紫市場」です。紫神社境内にある事務所で、菅原宮司様と商店街の副理事坂本正人さんよりお話を伺い、紫市場にて昼食。美味しい気仙沼の味を頂きました。

宮城県の神社の宮司様はじめ皆様に大変お世話になりました。学び多い旅行となりました。宮城県内の被災地の状況を少しでも知るとともに、地域や神社における備災について意識を高める貴重な機会となりました。



仙台市 大崎八幡宮を参拝



気仙沼市 紫神社を参拝



本吉町 八幡神社を参拝



気仙沼湾 岩井崎で海辺を散策



紫神社にて坂本さんのお話を伺う



「しおがま・みなと復興市場」

その後、塩釜神社を参拝

東日本大震災

慰霊祭・千度大祓
いれい おほほへ



七月二十一日海の日に、福島県いわき市小名浜の「アクアマリンふくしま」にて、東日本大震災「慰霊祭」と、慰霊鎮魂ならびに復興祈願の「千度大祓」が斎行されました。

いわき「大祓」の会の皆さんの主催で、四回めとなる「千度大祓」。宮城県を中心に全国から集まった百名の神職と参列者により大祓詞十巻を奏上しました。弥生神社神職も、心を込めて御奉仕して参りました。今年もともに奉仕した、國學院大學の神職を目指す四十数名の学生さんたちの姿が心強く、慰霊と復興への思いが次の世代まで引き継がれることを願いました。



そして慰霊祭では、浪江町請戸の「田植え踊り」が奉納されました。震災前は町の鎮守若野神社に毎年奉納されていた踊りで、現在も続く避難生活の中、町の人たちの保存活動によって守り通されました。会場全体が子供たちの一生懸命な謡や踊りを見守り、温かな空気に包まれました。

気仙沼市本吉町

八幡神社例祭



九月八日、気仙沼市本吉町八幡神社さんの例祭が斎行されました。御社殿での静かで厳かな神事の後、神輿の宮出しが行われ、本神輿を含めて三基と、東京の大宮八幡宮から寄贈された子供神輿一基が、境内のある丘を下り町を渡御しました。小泉川沿いでは例年通りに、小泉地区の主産業の一つである鮭漁の繁栄を願う神事が行われ、川の水と鮭が供えられ、養殖場の方々など地元の方が次々と榊を捧げ祈りました。

子供神輿を担ぐ中学生の鮮やかな法被、神輿を先導する太鼓や本格的な獅子舞は彼ら自身の発案。生き生きと舞い、苦勞しながらも元気に神輿を担いでいました。地元の方々の声援を受けながら小泉小学校の急坂を掛け声とともに担ぎ登り、きやーと逃げる小さな子供たちを獅子の頭で噛んでまわる姿も。「楽しい」と満面の笑みでした。見守る皆さんも笑顔と活気にあふれていました。

小学校の敷地には、本格的な仮設舞台が設置され、華やかに飾られた出店も並び、夕方には演芸大会が催され大盛り上がりだったそうです。震災後、年々賑やかに盛り上がってきたのは、「始めはボランティアの人たちが多く関わったが、今は地元の人たちがどんどん頑張るようになったから」という地元の方の言葉には説得力があり、印象的でした。





おめでとう!

赤ちゃんのお祝い・
子どものお祝い

金園社企画編集部／編
金園社
2008年2月

命名、お宮参り、ひなまつり、子どもの日、七五三、入園・入学など、一生に一度のお祝い事のしきたりとマナーを、イラストとともに解説しています。巻末には子どもの成長・健康を祈願する全国の神社一覧表を掲載。

本を読む。

「人生儀礼」を考える

今回は日本の人生儀礼に関する図書をご紹介します。子供のお祝い事を楽しむ学べるものから、人^{ちやうび}生の掉尾を飾る葬式の意義を考察するものまでを集めてみました。

小河洋友

(東京都内図書館勤務)



赤ちゃん・子どもの

祝いごと歳時記

伊藤 美樹／絵
生活たのしみ隊／編
成美堂出版
2014年1月

出産祝い、お宮参り、お食い初め、初節句、七五三…生まれてから入学まで成長とともに、その幸せに感謝。赤ちゃんが誕生してから、小学校入学までの行事・祝いごとを、楽しいイラストとともに紹介しています。子どもと楽しむ年中行事も掲載。



結婚式
幸せを創る儀式

NHKブックス1049

石井 研士／著
日本放送出版協会
2005年12月

人生の一大事「結婚式」。いま、私たちは、なにを願って結婚式を行なうのでしょうか。結婚式という儀礼文化の変容をあつかいながら、私たちの幸せのかたちの変化を考察しています。結婚式の意味を、宗教社会学の立場から捉えなおした一冊。



お江戸の結婚

菊地 ひと美／画・文
三省堂
2011年7月

江戸の結婚はどのようなものだったのか？ 武家や商家、農村の縁組は、どのようにすすめられたのか？ 女房となったその後の結婚生活は？ 画と文で江戸の結婚のかたちと意味を紹介しています。



お葬式
死と慰霊の日本史

新谷 尚紀／著
吉川弘文館
2009年2月

葬式・墓・慰霊をキーワードに、各地の多様な習俗・弔い方・死生観をたどり、死への向き合い方をやさしく語る、葬式の日本史。誰にでもやがて訪れる死を日本人はいかに考え、死者をどのように葬ってきたのかを考察しています。



写真1：仮神殿内の切り飾り

2：仮神殿『周防祝島の神舞神事』より

3：仮神殿内で行われる鎮座祭

4：堂々と神楽を舞う子太夫



八月十八日神舞当日、「入船行事」（連載第一回で紹介）ののち、シャギリ隊の先導で大分県伊美別宮社一行は、大歳社仮神殿に向かつて参進し、鎮座祭（着御祭）が行われる。そして四日間にわたり、岩戸神楽に始まる三十三種類の神楽舞が次々と奉納されていくのである。

平成二十四年に行われた祝島の「神舞」。その準備は半年前から本格化するという。なかでも仮神殿の設営は祭準備で最大の大仕事。島人総出で行われる。大柱以外の柱、竹、茅、葛などはすべて祝島の山から切り出される。釘は使わず、材は葛で結び固定する。屋根や側壁に使う茅は、二月に刈って干し、島民が区ごとに集まって苦編みをする。仮神殿に使われる小縄と島全戸を結ぶしめ縄も、藁を打って柔らかくするところから一本ずつ作る。神殿を飾る切り飾りは、十六の神様の形に切り出す。一枚に三十分から一時間を超えるものもある。お話を伺った神舞奉賛会会長の橋部さんによると、仮神殿の設営には多大な労力がかかるため、体育

館などを使う案も出たそうだが、島の人たちの意向で作り続けることになったという。その代案の話に及ぶと、同席していた島の方が強く「だめだめ」と首を振っていたのが、強く印象に残っている。

平成二十六年現在、島の人口は四百四十五人、うち七十五歳以上が五十%以上を占める。高齢化により、祭の継続には課題が多いが、神舞は島の人たちに元気を与えているという。「祝島神舞」のホームページには、協力しながらの準備作業は島民にとって「せえがえい」こと、やり甲斐があることであり、作業を通して島民の結束が強まり、技術が伝承されていくとある。そして次の言葉に島民にとっての神舞という存在の意味が集約されている―「島民が神舞を支え、神舞というお祭りが祝島を支えている」。

＊この連載は、平成二十二、二十四年の祝島訪問時の聴き取りと、以下の文献等をもとに執筆しました。（権）

【参考】祝島神舞奉賛会監修『祝島 神舞 2000』、山口県文化財愛護協会発行『周防祝島の神舞行事』（昭和五十三）、祝島神舞奉賛会ホームページ「祝島神舞」



写真5：大歳社の島居。伝承通り、椿の枝と竹が付けられる。額は、栗、ヤイナリ、大角豆、大豆、小豆の五穀で飾られている。一粒一粒付けるため2か月かかるという。立札には「…令和三年八月、大歳御祭神を勧請の際、伊美別宮社から授かった種子が今もこうして残り、種戻し祭事も、絶える事なく行われています。神舞奉賛会」と書いてある。



第三回 神坂峠遺跡

「神坂峠遺跡」は、長野県下伊那郡阿智村、標高一五六メートルの神坂峠にある古墳時代から中世にかけての祭祀遺跡である。

木曾山脈の南部、長野県下伊那郡阿智村と岐阜県中津川市の境界に位置する神坂峠は、

「古事記」に「科野之坂」、『日本書記』に「信濃坂」と記され、古くから、信濃と美濃を結ぶ古代東山道の要所として、また、東山道随一の難所として知られた峠である。

『続日本紀』に「美濃信濃二国之堺、径道險隘、往還艱難」とあるよう、神坂峠を越える道のりは、急峻で長く、雷雨や降雪などの天災も加わり、過去に多くの旅人が命を落とし、その様子が『凌雲集』『叡山大師伝』『類聚三大格』『今昔物語』など多くの古典に記され、「荒ぶる神の坐す峠」すなわち、「神の御坂」と呼ばれるようになった。

古来、わが国では、山岳・河川・海洋・樹木・巨岩などの自然物には、神が宿ると信じ、祀りを執り行い、さらに、峠や河川越えの難所には、荒ぶる神が居て、転落や落石、

雷雨や降雪などの災難は、神によってなされることと考え、人々は神の怒りに触れぬよう、祭具を手向け、旅の安全を祈願した。

ちはやぶる 神の御坂に 幣まつり 斎ふいのちは 母父がため

（神の御坂に幣をたてまつり、命の無事を祈るのは、母と父のため） 『万葉集』巻二十

これは、天平勝宝七（七五五）年、防人として筑紫に派遣された埴科郡の主帳、神人部子忍男が、神坂峠を越える際に詠んだ歌である。

このように人々は、神坂峠越えに際し、鏡・剣・玉などの宝器を模した石製模造品をつくり、祭具として奉献し、峠神に対し、旅の安全を祈願した。そうした人々によって残された祈りの跡が、いわゆる「神坂峠遺跡」である。

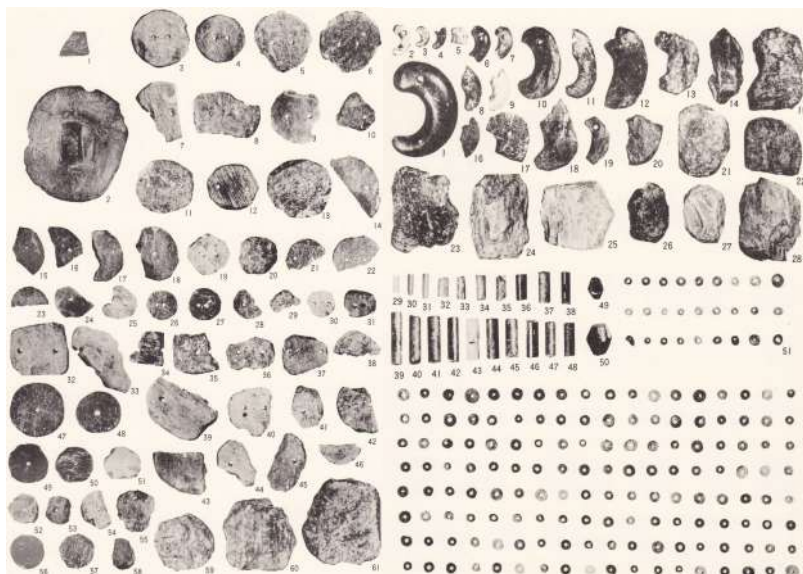
近年になり、考古学者の鳥居龍蔵や、下伊那誌編集会による考古資料の採集によって、神坂峠遺跡が全国的にも類例のない「荒ぶる神」への祭祀遺跡であることが実証されると、これを受けて、昭和四十三年、阿智村教育委員会によって、本格的な発掘調査が実施されることとなった。

発掘調査では、峠の頂部の平坦面で、礫を積み上げて構築した直径約四メートル、高さ約一メートルの積石塚や、古墳時代から中世にかけての土器や陶器、白銅鏡・鉄鏃・鉄斧・刀子・槍鉋・環などの金属製品、勾玉・管玉・

鍔・斧形・白玉・ガラス小玉などの玉類、鏡形・刀子形・鎌形・斧形・馬形・剣形・円盤形の石製模造品が数多く発見され、当時の峠祭祀の実態が明らかとなり、神坂峠の由緒が改めて見直されることとなった。

このときの調査成果は、翌年、昭和四十四年に発掘調査報告書『神坂峠』にまとめられ、紹介されている。また、

遺跡は、昭和四十七年に全国初の峠祭祀遺跡として長野県史跡に指定され、昭和五十六年には国史跡に指定された。



【参考文献】

大場磐雄『神坂峠』阿智村教育委員会、昭和四十四（一九六九）年三月二十日発行
市澤英利『東山道の峠の祭祀・神坂峠遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」〇四四、株式会社新泉社、平成二十（二〇〇八）年三月十五日発行

*写真は、大場磐雄『神坂峠』阿智村教育委員会より転載



お祝いの気持ちをこめて。

きんちゃく
手づくりの巾着袋



菊結びの髪飾り



弥生守り



ちよろ

弥生神社では、七五三詣でのお祝いに手作りの巾着袋をお渡ししております。女の子の巾着袋には、縁起の良い菊結びがついた綿ちりめんの髪飾り、男の子には菊結び、叶結びとトンボ玉をあしらったストラップが入っています。一年間、ひとつひとつ心を込めて手作りしました。健康と招福を御祈願した弥生守りの袋と絵馬は、月とうさぎと菊の花をモチーフに、当社オリジナルで描きました。絵馬には神様への感謝や御祈願の言葉を書いて、神社にお納めください。お子様の健やかな御成長をお祈りしております。



絵馬



弥生神社



菊結びとトンボ玉の
ストラップ

編集後記

銀杏の葉が色づき、お子様たちの晴れ着も鮮やかに、境内が華やぐ季節になりました。前号の感想を頂いたり、執筆者の方から素晴らしい原稿が届いたり、米糴を頂き、ようやく第三号の発行となりました。ご協力頂いた皆様に心より感謝しております。安産祈願からお葬式まで、人生儀礼をみわたすと、神様への感謝や祈りが、些細な行為ひとつひとつに込められ形となり、御先祖から今に伝えられてきたのだと、感動を覚えました。また、それら儀礼には、喜び祝つ、忌憚むという面があります。人々の心の奥には、どうにも予想できない運命や未知の世界、生命、自然への畏れが宿っていたのだと気づかれます。そして、人は人生儀礼を通して、家族や親類と共に祝い、地域社会に迎えられ、役割を得てきました。それらは様々な世界と出会い、各段階へ移行するための、人生の通過儀礼とも言えます。自然と親密な日本人の生命観や人生観を思うとき、フランスの文化人類学者A・ヘネツが世界各地の儀礼を論じた『通過儀礼』の文章が思い出されます。「人の一生の歩みを宇宙における通過、つまり天体の運行、月の満ち欠けと結びつける民族さえある。人の生活の諸段階を動植物の諸段階へ関連せしめ（略）宇宙の偉大なるリズムへ結びつけるのは、ひとつの壮大な観念である」。人生の節目で立ちどまり、様々なスケールのうちに生きる私を、無限の時空の中で縦横において感じたとき、生死の意味や、親しい人たち、先祖、社会、自然……との関わりに思いを馳せるでしょう。七五三詣のなやまりがたさに触れ、ぼとけ安らぐかもしれない。心を開かれていきましよう。こんなふうに私自身と向き合い、神様に感謝する場として人生儀礼があり、その度に人々は神社に参拝したのだと思います。（権）

編集・発行 弥生神社 海老名市国分北二・一三三三